# 高濱虛子全集

## 第十四卷　紀行・日記集

毎日新聞社

〈編集委員〉

高濱　年尾
福田　清人
深川正一郎
松井　利彦
山本　健吉

定本　高濱虚子全集
第十四巻　紀行・日記集

印刷　昭和四十九年七月二十日
発行　昭和四十九年七月三十日

著　者　高濱虚子
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
装　幀　熊谷博人
題　字　矢萩春恵
発行所　毎日新聞社
〒100 東京都千代田区一ッ橋
〒530 大阪市北区堂島上
〒802 北九州市小倉北区紺屋町
〒450 名古屋市中村区堀内町
印刷所　図書印刷
製本所　大口製本

9392-480014-7904

# 第十四巻　紀行・日記集

目　次

紀行篇……九
半日あるき……一一
俳馬車行……一九
高野詣……二二
高野豆腐／二二　大糞流し（上）／二三　大糞流し（下）／二四
修善寺短信……二六
修善寺紀行……三一
箱根越……三六
田澤湖……四三
（上）／四三　（下）／四六
汽車奥の細道……五〇
日光／五一　平泉／五四　奥の細道／五八　青森灣／五九
起きてから舟まで……六二
富士登山……六六
小樽まで……七二
盛岡を過ぎて／七二　一戸を過ぎて／七三　千曳を過ぎて／七四　田村丸から／七四
小樽から（一）／七六　小樽から（二）／七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小樽から後ち……八〇
雪……八七
くれなゐ丸にて＝瀬戸内海を一周……九三
霞が池……一〇〇
花の都……一〇三
高原行……一一〇
鵜飼見……一一六
（上）／一一六　（下）／一一九
欅並木（武蔵野探勝の一）……一二五
花の旅……一三二
奈良街道……一三七
南十字星……一四一
箱根丸から／一四一
巴里紀行……一四四
マテーズ氏／一四四
洋行雑記……一四八
和服／一四八　海上生活／一五〇

滯歐襍記……一五三
ドーム寺院の鐘の音／一五三　ハイデルベルヒ／一五五　ビュルガ姉妹／一五七
歐洲俳句の旅……一六〇
姨捨紀行……一六六
深耶馬……一七〇
寂光院……一七二
羽黑山行……一七六
叡山……一七九
日記・日錄篇……一八三
机廼塵……一八五
病床日誌……一九二
俳諧日記……二三四
四夜の月……二三一
九月十三夜／二三一　十四夜／二三二　十五夜／二三三　十六夜／二三七
修善寺日記……二三八
北陸旅行の日と人……二四六

端書たより……二五二
肥前の國まで……二五四
棚尾、名古屋、大阪……三三
滿洲行前記……三四六
河鹿……三六七
旅だより……三六九
花時の旅……三七五
海晏寺……三八六
東慶寺……三八八
老いての旅……三九二
京都／四〇七　京都ツヾキ／四一　叡山／四一四　慈鎧前座主／四三
身延行……四二六
校異篇……四二九
解題……松井幸子……四四三
解説……高濱年尾……四五三

第十四巻

# 紀行・日記集

# 凡例

一、本集は、新聞、雑誌、単行本に初出の紀行、日記・日録を用いて底本とした。

一、各篇の末尾に初出の年月日、新聞名、雑誌名、単行本名を附した。

一、校異篇を設け、本文と単行本所収の紀行、日記・日録を対比、異同の個所を明らかにした。

一、この集に関して校合した単行本等を記すと、『寒玉集』ほとゝぎす發行所、『虚子小品』（小品叢書第六卷）隆文館、『十五代將軍』阿蘭陀書房、『渡佛日記』改造社、『紀行文・俳文』改造社、『武藏野探勝　上』甲鳥書林、『虚子俳話（續）』東都書房、『俳句文學全集　高濱虚子篇』第一書房、『現代俳句文學全集　高濱虚子篇』角川書店、『年代順虚子俳句全集　第一卷』新潮社、『年代順虚子俳句全集　第二卷』新潮社、『高濱虚子全集　第一卷』改造社、『高濱虚子全集　第三卷』改造社、高濱虚子全集　第六卷』改造社、『定本虚子全集　第十卷』創元社、『定本虚子全集　第十一卷』創元社、『子規全集　第二十卷』改造社、「國民新聞」、「大阪毎日新聞」、「東京日日新聞」、「讀賣新聞」、「週刊朝日」「サンデー毎日」である。

一、本文は、底本の用字、仮名遣い、誤植、ルビは原則としてそのままにすることとし、誤植にはママを附した。訂正は校異篇による。ただし底本が総ルビの場合は原則として、ルビを削除した。

一、難訓については初出の個所で新しくルビを附した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 紀行篇

# 半日あるき

午前十一時客が去つたから例の一冊の手帳と鉛筆とを携へて我家を出た。例の如く何處と極めたわけではないので眼鏡から馬車に乘つた。僕は馬車に乘ると席さへ空いてをれば一番御者に近いところに坐るのが例であるので今日も其處に坐つた。爰處に坐つてゐると馬の尻が常に目につくので御者が手僻のやうに革の鞭で其處を打つのが氣になつてならぬ。

目の前に寒き日影や馬の尻

と試に口の内で言つて見たがこれは甚だ幼稚な句で殊に「寒き日影や」の所などは初心極るので頻りに思案してゐるうち一匹の馬は尾を後ろへ突き出して走り乍ら糞をした。其の糞をしてゐるところを句にしやうと思ふたが如何にも殺風景でものにならぬ。

五軒町から僕の向へ側に坐つた一人の老人がある。其の白い毛の交つた眉毛から鼻の横の皺からがどこか見たことのあるやうな、殊に其の色のあせた大黑頭巾は僕の國の永野のおいさんといふ人のに其の儘であるので頻りに興が動いて來た。

色あせた頭巾被りし翁かな

これはあまり平凡であるから

色あせた頭巾被りて老にけり

ともして見たが、之は一層面白くないやうだ。

夜根岸からの歸りに上野の山を出て廣小路の夥しき灯を見る時はいつでも僕は快感をおこすのだが、晝間廣小路から石段を插んでゐる松交りの冬木立を眺めた時も一種の美感を起こさゞるを得ない。

松　冬　木　上　野　の　山　の　出　口　か　な

馬車は今萬年町を通つてゐる。

古　着　屋　に　時　雨　れ　て　う　す　き　入　日　か　な

とは嘗て作つた陳腐な句だがいつ來ても此の陳腐な感が起こる。襤褸を選り分けてゐる隣には空き瓶を束にしてゐる。牛飯屋と駄菓子屋とは一軒の家を二軒にしきつてゐるので二階には互にまけずに汚たない布團を干してゐる。

清島町での馬繼ぎは最愉快だ。馬車が著いたかと思ふと汚ない洋服を著て草履を穿いた男が鈴を振つてゐる、新たらしき御者はもう新たらしい馬を曳いて來る、今迄の馬は今迄の御者と共に驛舍に這入る、車掌も早や交代してゐる、新たらしき御者の鞭のもとに新たらしき馬は一嘶きする、馬車はもう進行を始める。西洋の小說に驛舍のことが克くあるが西洋好きの僕は爰へ來ると大變得意だ。

洋　服　に　首　卷　し　た　る　馬　丁　か　な

雷門で馬車を下りると人力車夫が車をすゝめるのが五月蠅い。東橋亭には晝寄席がかゝつている。晝寄席にはまだ這入つたことがないが表から見ると夜より趣があるやうだ。

晝　寄　席　の　下　足　す　く　な　き　寒　さ　か　な

吾妻橋の右側の人道の上に人だかりのしてゐるのは例の川蒸氣を見てゐるのだ。川蒸氣は見てゐるのも面白く乘るのも面白い。此頃は船著きが多いやうで向河岸にも一個所厩橋との間にも一個所出來てゐる。

小　蒸　氣　や　ボ　ー　ト　も　漕　い　で　春　の　水

春水や湯を吐き出す川蒸氣

昨日が節分であつた爲めでもあるまいが綾瀬あたりから霞んでゐるやうだ。枕橋には名物、なりひらしゞみも面白く、家根舟、てんま船、かし船、荷足船も時に取りて興がある。八百膳の料理の一艘の船に積まれてこれから何處かに漕ぎ出しさうなのもある。

水ぬるむ其の川べりの芥かな

長命寺は燒けたまゝにて再建が出來ず、三圍の社には新たらしく石の玉垣を造るとかにて寄附金の札を建て連ねてゐる。其角堂の前の池は枯蓮に厚く氷が張つたまゝである。

水ぬるむ氷の下の小魚かな

白鬚神社

梅咲いて白鬚寒き社かな

百花園に至ると人力車が二三輛來てゐる。梅はまだほんの咲きかけたといふ許りだ。梅林の下に佇んで一句だけ梅の句を寫生しやうと思へど出來ず。

暖き梅の日面や二三輪

と其儘のことをいふて見て梅の日面が氣に入らず、

暖き日面の梅や二三輪

と文字を顚倒して見ても出來したることもない。ふと氣附いて見るとこれは陳腐極る趣向であつて殆ど同樣の句が誰れかに有つたかとも疑はれるから更に、

二三輪梅の古木を愛すかな

として見るとこの下十二字は一度自分が用ゐたことさへ有つたやうに覺えて數日前空想で產み出した梅十句の方

が作り易かつたのも情けなく、少し氣を轉じる積りで霜に荒れた畑の土のほろ〳〵と乾てゐるのを見て、

梅咲いて土ほろ〳〵乾きけり

とやつつて見るとこれもどうせ碌な句ではないけれど前の句よりはすこし新たらしい所があるのでこれで無理に滿足してもう梅の寫生はやめにした。

梅林を離れて秋は萩などの盛んに咲く池の彼方に行くと、この邊は棕梠なども繁つてゐる日蔭で、下駄の裏にべた〳〵と泥が著く。

秋草は皆枯られけり霜柱

いつもの椽に腰を掛けて休んだ。此の椽にかう腰を掛けて休むと數年前のこと迄が回想さるゝ。子規飄亭二氏と共に此の椽に腰を掛けたこともあつた。碧梧桐氏と共に掛けたることは恐く三度や四度ではない。獨り來て腰を掛けたことも一度や二度ではない。此後又幾度來て腰を掛けたことか知れない、如何なる人と連だつて來て腰を掛けるかも知れない。併し僕許りでない他の幾何の人が僕と同じく爰に來て腰を掛けることであらうか。縱に横に此の一個の椽に就て起す想像は殆んど果てしがないやうだ。

この椽は日を南に受けてゐるので非常に暖い。殆ど羽織が脱ぎたいやうな心地で愉快でたまらぬ。目の前には蝶も蜂も飛んで居らぬが、僕の頭の中には蝶も蜂も飛んでゐるので、僕はかういふ場合に克く陷る空想に此時も終に陷つてしまつた。其の空想はさま〳〵であつたが其の中に鳴雪先生としきりに議論をした一節があつた。それは先生と草木の美と人間の美就中戀との比較論をしてゐるので、先生がそれでは虚子君はあのやうなのも梅の花よりは勝つてゐるのでしやうなと指されたのは彼處の床几に腰を掛けてゐる二人の男女で、二人は最前から人目も憚らず頻りにふざけてゐるのだ。僕が答へて、いへさういふわけではないのであります。先生の如く風雅即ち



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com